

目的 我が国の悪性新生物の死亡率は戦後上昇しており、部位として結腸は年々の上昇率が著しい。一方、戦後の食生活の欧米化は、蛋白質（PRO）、脂肪（FAT）の摂取量の増加と食物繊維（TDF）摂取量の減少をもたらしており、このような食生活の変化が、結腸がん死亡率の上昇に関与している可能性が高いと示唆される。そこで、結腸がん死亡率とTDFや各栄養素の摂取量との関係を経時的な面から解析するために、地方衛生研協議会のTDF分析値並びに各種死因統計資料よりこれらの相互相関分析を行ったので報告する。

方法 年次別TDF摂取量は、国民栄養調査の食品群別表をもとにTDF群別表を作成し、国民一人一日当たりの食品群別摂取量表から算出した。昭和22～62年の結腸がん死亡率とTDF摂取量との相関係数を求め、以後1年ずつ27年まで移動して時差相関係数を求めた。

結果 TDF摂取量は昭和22～38年まで急激に減少し、昭和39年以降は16g前後で推移しているが僅かな減少傾向にあった。穀類、いも類、豆類からのTDF摂取が著しく減少し、海藻、果物からの摂取が増加傾向にあった。結腸がん粗死亡率は、TDF、TDF/エネルギー（ENE）、TDF/PRO、TDF/FATとの間に負の相関、FAT、PRO、FAT/TDFとの間に正の相関を示した。結腸がん粗死亡率はTDF摂取量が17gを下回る昭和39年頃より急激な増加を示した。時差相関係数は、各栄養素とも年数をずらすことによって相関度が増し、それぞれのピークが得られた。各移動年における相関係数は、TDF、PRO、FAT、TDF/PRO、FAT/TDFが高い相関を示した。以上の結果から、結腸がん死亡率の年次推移にこれらの栄養素の影響が示唆された。